

無縁社会と家族

Non-bond Society and Family

永井 広克

NAGAI Hirokatsu

はじめに

2010年1月に放映されたNHKスペシャル「無縁社会～無縁死3万2千人の衝撃」は大きな社会的反響を巻き起こした。番組では、無縁死を遂げた人々の足跡を追うと同時に、故人宅に遺品整理や清掃を専門に請け負う特殊清掃業者や永代供養の合同墓を建立したNPO法人の活動などを取り上げ、地縁、血縁などの社会的つながりが弱体化した日本社会の現状を浮き彫りにした。

無縁社会化が進んだ背景には、急速に進む少子高齢化、非正規雇用の拡大に伴う生涯未婚率の増加、プライバシー意識の浸透によるコミュニケーションのあり方などの変化がある。無縁死が起こる単身世帯の割合は05年の30%から30年には38%まで増えると予想され、家族を基盤とするつながりは希薄化する一方である。

ところでNHKが使った無縁という言葉は死と結び付けられ、無縁死と表現されている。無縁仏とか無縁墓と言ひ回しと似ている。広辞苑によれば、無縁とは「①縁のないこと、関係がないこと。②⑦前世において仏・菩薩に因縁を結んだことのないこと。④死者を弔う縁者のないこと。⑤特定の対象を離れ、平等で差別のないこと」とある。一般の用法では無縁というと、「①縁のないこと、関係がないこと」という用い方がまず思い浮かぶが、NHKでは、「④死者を弔う縁者のないこと」という意味に重きを置いている。人間は本来死ぬ時は家族や親しい人に見守られて逝くべきなのに、誰にも看取られず1人寂しくあの世へ旅立った哀れな人という意味合いを込めている。

死後何日もしてようやく発見される無縁死の人は3万人を超え、自殺者の数とほぼ同じ位だが、普通の家庭からも死が姿を消している。自宅で亡くなる人は減少し、病院や老人ホームで亡くなる人が圧倒的に多い。自宅で生れる赤ちゃんも今はほとんどいなくなったが、自宅で死ぬ老人もごく僅かになった。家庭から誕生と死が消え去ったのである。これも核家族化に伴う家族機能の縮小化の表れだが、「①縁のないこと、関係がないこと」という意味での無縁が家族機能の縮小と共に社会を覆い尽くそうとしているかのようである。

具体的には単身世帯の増加が無縁死の背景にあるが、家族がいるから無縁死と無縁とは限らない。きょうだいや子どもがいても、遠くに離れて住んでいたり、近くに住んでいても、

日頃交流がなければ、無縁死に陥るおそれは十分にある。

そこで無縁死を生む家族の現状とそれを防ぐ家族のあり方、さらに1人の個人としての生き方を考察する。

1. 家族の機能と役割

家族は社会の基礎的な集団であり、自然発生的な集団の代表とされるが、社会の中で存続していくには何らかの機能も果たしている。全体社会との相互作用によって家族は存続する。自分が生まれる定位家族よりも配偶者と営む生殖家族の方が、基礎集団というよりも機能集団の性格が強い。また一般に生殖家族、つまり親の立場から見た機能が家族の機能とされる。

拡大家族の機能として、経済、地位付与、教育、保護、宗教、娯楽、愛情の7機能がある。生計を維持し、誰その夫や妻といった地位を付与し、子どもを産んで育て、病人や弱者を保護し、神仏を信仰したり、先祖崇拜などの超俗的な宗教的な機能を果たし、家庭団らんや旅行など家族揃って生活を楽しみ、夫婦愛や親子愛などの愛情を育む。

機能を具体的に表現すると、家族員がそれぞれ担う役割となるが、拡大家族の役割として、家事役割、所得を得る役割、緊張緩和と情緒的統合の役割、老幼弱者の介護役割、渉外的・家族を代表する役割、先祖を祭る役割がある。家事役割と所得を得る役割が基本的な役割で、これを円滑に遂行していれば家族関係はたいてい円満になる。緊張緩和と情緒的統合の役割は夫婦、親子、きょうだいを精神的に結び付ける役割で、2つの基礎的な役割に次いで重要である。次は老幼弱者の介護役割で、子どもを育てたり、病気になった家族員を看病したり、身体都合が悪くなった家族員を介護したりする。失業したり、定年後、年金暮らしもままならない高齢者を養う役割も含む。拡大家族の7機能のうち、保護がこれに相当する。

この7機能は家族の規模の縮小と共に、愛情以外の機能は、経済は企業、教育は学校、保護は政府などの機関に吸収されていった。産業化以前の家族は、生産手段を有する経済単位として機能していた。農家や自営の人たちは、生産手段として農地や家業の継承・維持のために直系家族制を維持していた、しかし、近代工業の発達により家族は生産手段を失って、生活の場である家庭と職場が分散していった。生産機能の放出が行なわれ、家族は消費の単位となった。したがって、失業したり、定年後、年金暮らしもままならない高齢者を養う役割も、現代の家族は持ち合わせないとも言える。かつて家族は生まれながらにしてその子どもが属する社会の決められた位置に方向づける機能を有していた。どの家族に生まれたか、自分の性別やきょうだいの順位が自動的に生き方を決めたのである。

しかし、産業化の進行と夫婦家族制の浸透により、核家族化が進行する。核家族の機能は経済、性、生殖、教育である。雇用者として職場に通勤し、働いて賃金を獲得する。結婚して夫と妻が性関係を恒常的に保ち、子どもが生まれる。その子どもを育て、しつけて1人前にする。だがこの4機能の働きは低下している。親が生活習慣を身に付けておらず、親の責任感や気構えが弱くなる。「早寝早起き朝ごはん」といった生活習慣ではなく、「遅寝遅起き朝ごはん抜き」という親が増えているし、デキ婚のように思わぬ妊娠で結婚し、出産はしたものの、子どもを1人前に育てるという責任感も能力も持ち合わせない親が増えている。端

から見てると子どもはかわいいが、自分がいざ親になってみると、子どもかわいいだけでなく、とても世話の焼ける存在だということを身をもって体験し、あわてふためくのである。

そこで家族機能が縮小するにつれて、新しい家族機能が生じている、夫婦の伴侶性と精神保健機能である。今やひとり親家庭が増え、家族の機能は子どもを産んで育てることよりも、夫と妻が手を取り合って人生の荒波に立ち向かっていく同伴者だという働きと、夫と妻だけでなく親と子どもやきょうだいのところをすこやかに保つ働きが目立ってきた。家族の物的な機能よりも精神的な機能が大きくなり、親子関係よりも夫婦関係が比重を増してきた。

内閣府の調査によれば、「あなたにとって家庭はどのような意味を持っていますか？」という質問の答えは、「家庭団らんの場合」が一番多く、「休息・やすらぎの場合」「家族の絆を強める場合」と続く。家族の役割を大きく「休息・やすらぎを得ること」「子どもを生み育てること」「相互扶助」「生活の糧をえること」の4つに分けると、「休息・やすらぎを得ること」が一番重視されている。

前述した精神衛生機能が一番重視されている。学校や職場などの場では競争が激しくなりすぎすぎた人間関係がはびこるにつれ、家族には、学校や職場の競争で傷ついた心を癒す役割を求めている。ただこれはあくまで理想の家族の役割であり、現実の家族生活では満たされない役割だとも言える。現実には家族員の生活時間がばらばらであり、家族が全員揃うべき食事も孤食という言葉が生まれたようにばらばらにとり、休息・やすらぎを得ようとしてもかえって夫婦や親子の葛藤が大きく、ストレスの場になったり、家族の絆を強め、一致団結して困難に立ち向かおうとしても、絆どころか日頃会話もほとんどない家族もあるだろう。配偶者や子どもと一緒に暮らしていても、1人暮らしとあまり変わらない人もいるだろう。

家族形態は核家族化が極限にまで進行し、夫婦のみや1人暮らしが増加している。休息・やすらぎを得ようとしても、長年連れ添った配偶者しかいなければ、それほど得られないだろうし、そもそも1人暮らしでは孤独感がいやがうえにも高まる。もっとも老人の自殺は三世同居の大家族が多いことから考えると、家族員が多いほど葛藤が多く、とうてい休息ややすらぎの場になりえないこともあるから、夫婦のみや1人暮らしだからと言って孤独感や寂寥感が強いとは必ずしも言えない。人生の山や谷を2人で乗り越えてきた老夫婦のみや気楽な1人暮らしの生活が、心から休息ややすらぎの場になるとも言える。大家族にしる小家族にしるそれぞれの家族によって、休息ややすらぎの場にもなるし、緊張に満ちた場にもなりうる。

というものの、ひとり暮らしの自由さの裏面にはリスクも付く。1人暮らし、とりわけ若者の単身者が増加したのは、非正規就業者や無業者が増加し貧困層が拡大したからである。正規就業に付けないと収入が少ないかほとんどない。そこで初めは親元で暮らすのだが、いつまでも非正規や無業が続くと親との間で葛藤が生じ、家を飛び出し、1人暮らしをするようになる。

「こども・若者白書」を報ずる新聞記事によれば、15歳～24歳の非正規雇用者は30.4%に達し、失業率は全年齢平均が5.1%なのに対し、15歳～19歳が9.8%、20歳～24歳が9.1%と悪化し、15歳～34歳のフリーターは2年連続で増加し、約183万人に上り、不況の影響

が若者を直撃している。生活保護を受給する人も増加し、全国で2百万近くに達する。これは戦後の混乱の余波から約204万人を記録した1952年並みの水準である。ただ県内の受給者は1701人で、受給世帯が1425世帯でともに全国最小である。このことからやはり三世代同居の大家族が収入が低いか、働き口のない家族を養う力が大きいことがわかる。それゆえ貧困が単身者を生むというよりも、単身であることが貧困を生むとも言える。

また単身者は家族とのつながりが薄いことに加え、地域社会とのつながりも薄く、孤立している。日頃から隣近所に住む人たちとの交流がなく、まさに「隣は何をする人ぞ」の状況である。コミュニティが形成されにくい都会でこの傾向が顕著だが、この地域社会からの孤立が孤独死の背景にある。従来は単身者は結婚する前の若者が多かったが、非正規就労やフリーターの増加で彼らが中高年化したことに加え、子どもたちが巣立ったのちの「空っぽの巣」の高齢夫婦のどちらかが死ぬと、高齢者の単身者も増加することになる。

2. 生活の満足度と人間関係

生活の満足度を高める要素は、「家族と一緒に過ごす時間が取れる」「隣近所と行き来する」「職場の人と行き来する」「単身世帯でない」「既婚」「年収が高い」である。最近、重視されるようになった幸福度を決めるのは、健康、家族、収入だと言われるが、満足度も似たような要素が大事になる。家族、地域社会、職場の人間関係が豊かで、孤立しておらず、経済的にも豊かであれば、生活の満足度が高い。独身者よりも既婚者の方が長生きするが、夫婦では一般に夫が先に逝き、妻が後に残される。その妻は夫の死後もずっと生き続けるが、逆の場合は、夫は妻の死後、ほどなくして自分も亡くなることが多い。「男やもめにうじがわき、女やもめに花が咲く」のである。そういった点から考えると、独身を貫いた男は妻を亡くした男よりは長生きする。初めから1人なので1人暮らしの気構えが身に付いているのである。

地域、職場との交流も大事な要素だが、家族に比べると部分的な付き合いを望んでいる。高齢白書によれば、高齢者の社会的なつながりを国際比較すると、日本は血縁以外に頼れる近所の人や友人がいる割合が最も低く、国際的に孤立している実態が明らかになった。日本、韓国、アメリカ、ドイツ、スウェーデンの5か国の調査で、「困ったときに同居の家族以外で頼れる人」はどの国も「別居の家族・親族」が過半数を超えるが、アメリカ、ドイツ、スウェーデンは「友人」「近所の人」と続き、「いない」は僅かである。日本、韓国は「近所の人」「いない」「友人」と続く。アジアは血縁中心だが、韓国よりも日本にその傾向が強く、「近所の人」が5か国中最下位である。地域社会のつながりが薄く、血縁中心で社会的孤立が進んでいる。これが無縁社会のひとつの様相である。

近所の人頼りにならないということは、人間関係がどの領域でも難しくなったとことの一つの表れだが、人間関係が難しくなった要因は、「人々のモラルの低下」「地域のつながりの低下」「人間関係を作る力の低下」「核家族化」「ビデオ・テレビゲームの普及」である。

「人々のモラルの低下」とは、ギスギスした人間関係がはびこり、遠慮や謙譲といった日本的道徳はもとより、信頼に裏打ちされた協力、助け合いといった公共心が薄らいでいることである。

「地域のつながりの低下」はまさに「近所の人」が頼りにならないことであり、そもそも交流自体もほとんど行われていない。加えて近所の人には弱みを見せたくないという日本の心情も働いている。「人間関係を作る力の低下」は、いわゆるコミュニケーション能力の低下が影響している。国際比較でも友人が頼りにならない割合が高い。家族や職場などの半ば強制的な人間関係ではなく、頼りになる友人を自発的に自由に作る能力が低い。欧米のパーティではできるだけ知らない人に声をかけ、人間関係を広めていくのに対し、日本では顔見知りの人としか話さず、人間関係が広がらないことにも日本人の人見知り傾向がうかがえる。これは子どもの頃から人にもまれず人なれしていないことだが、核家族が進行し、家族といえば親ときょうだいの小家族で、祖父母やおじ、おばがいない。タテとヨコの関係だけで、ナナメの関係が薄い。上下の関係か対等の関係だけで、上下でもなく対等でもない微妙な関係が少ない。この微妙な人間関係が人間関係を作る力を磨く。肉親であれ他人であれ、人間関係は和解と葛藤の繰り返しだとも言える。何らかの揉め事があるとそのまま関係が断ち切るのではなく、「雨降って地固まる」の喩えのように、揉め事によって人間関係が強まることもある。人間関係は静的なものではなく動的なものであり、ある意味では不安定なものであるが、それ耐えうたくましが、人間関係をうまくさせる。「ビデオ・テレビゲームの普及」も「核家族化」の一つの表れである。祖父母やきょうだいが多ければ、彼らとからだを使って遊ぶことができるが、かぎっ子に典型的に見られるように、家に帰ってきて遊び相手がいないと、ビデオやテレビゲームにのめり込みやすい。ビデオやテレビゲームは血の通わない機械であり、生身の人間ではない。そんな機器とばかり接していると、人間関係を作る力が低下するのは当然である。

前述の国際調査は「困ったとき同居の家族以外で頼れる人」であり、同居の家族は何と言っても一番頼りにされている。血縁で結ばれた親やきょうだいとはふだんは仲が良くないかもしれないが、いざという時には頼りにされている。しかし父親、母親、息子、娘といったそれぞれの立場に応じて同居家族との交流に差異がある。

同居家族との交流が少なくなる要素として、「男性である」「年齢が高い」「労働時間が長い」「独身者である」である。父親であるにしろ息子であるにしろ「男性である」ことは他の家族員との交流が薄い。父子関係と母子関係を比較すると、母子関係が緊密だし、息子は思春期を過ぎると親とはほとんど話さなくなるが、娘は親やきょうだいとよく話す。「男性である」ことは寂しいものであるが、その孤独さを男は愛する。「年齢が高い」は、高齢者になると子どもからそっけない扱いを受けることもある。さらに高齢者虐待が生ずることもある。子どもの頃から核家族で育ち、祖父母と身近に接したことの少ない後遺症だとも言える。「労働時間が長い」は残業の多さと年休が満足に取得できないことである。都会だとこれに通勤時間の長さが加わる。子どもが寝てしまってからようやく帰宅し、翌朝、子どもがまだ寝ている早朝に出勤し、何日も子どもの起きていた顔を見たことがない父親もいる。夜遅く帰宅し、あわただしく入浴、食事をすれば夫婦の会話も少ない。「独身者である」とは適齢期になっても結婚をせず、親元で暮らすことである。いわゆるパラサイトシングルで、近年その年齢が上昇し、中年化している。子どもとりわけ息子がそんな状態になると、親との会話も途絶えがちになる。

別居家族となると、さらに交流が薄れる。「別居親族との交流が少なくなる要素」は、「男性である」「子どもや孫がいない」「年齢が高いこと」「別居家族と容易に行き来できない場所に住んでいる」である。

「男性である」が再び一位に挙げられている。男であることは、家族と同居にしる別居にしる、親や配偶者、きょうだい、子どもといった家族員すべてと疎遠になりがちなのであろう。特に若い時は親と、中高年になると子どもと疎遠になりがちである。「子どもや孫がいない」は結婚しても子どもが生まれなかったか、ずっと独身を貫いた結果だろうが、そもそも交流できる子どもの家族がいないのである。「年齢が高いこと」は同居であっても交流を阻害する要素だが、高齢者になると、遠くに住んでいる子どもの家族に会いに行こうとしても、身体の具合が悪くて会いに行けないこともあるし、遠距離の移動は健康であっても高齢者にはこたえる。近年騒がれているオレオレ詐欺は、子どもや孫と離れて暮らし、日頃、直接会うこともなく、電話でもほとんど話さないが、子どもや孫に対する愛情だけはたっぷり持っている高齢者の悲喜劇である。

「別居家族と容易に行き来できない場所に住んでいる」は心理的には近いが、地理的に遠くに離れているので気軽に顔を見に行くことができない。新幹線が日本列島を縦断し、割安の高速バス網が張り巡らされていても、高齢者にとって、子どもの家族に会いに行くのはひと仕事なのである。乗り物に長時間乗り続けるととても疲れるし、交通費もかかるのでおいそれと子どもの家族に会いにいけない。それに長年、子どもの家族と交流がほとんどないと、会いに行っても迷惑がられることになる。だからいっそう疎遠になり、病の果てに孤独死になりかねない。

ちなみに孤独死の状況は 65 歳未満が占める割合は、男性が 38%、女性が 14%で、60 歳代は男性が女性の 4 倍、70 歳代は 1.5 倍だが、80 歳以上になると僅かに女性が多くなる。

3. 1人暮らしの死に方と生き方

1人暮らしの増加に伴い、孤独死も増加している。家族に看取られながら畳の上で死ぬのはある意味では贅沢なこととなりつつある。そこで、1人暮らし、いわゆるおひとりさまが端に迷惑をかけず、自分も幸福に死ぬ5か条は以下のとおりである。

第1に、死んだら時間をおかずに発見されるように、密でマメなコンタクトをとる人間関係をつくっておく。常日頃からと隣近居に茶飲み友だちをつくっておいたり、離れている友人や家族とも電話はメールなどで連絡をこまめにとる。そうすれば姿が見えなかったり、連絡が来ないと、すぐに駆けつけてくれる。

第2に、遺したら、残された人が困るようなものは早めに処分しておく。誰しも他人や身内にも見せたくないものがある。人の悪口を書いた日記や手帳、浮気の証拠、人に言えない自分の秘められた趣味などは、死期が近づいたらすべて処分する。「断舍離」をきっぱりと実行する。あの世に手ぶらで行くようにする。

第3に、遺体・遺骨の処理については、残された人が困らない程度に、希望を伝えておく。死後すぐに発見されるにしる何日かたって発見されるにしる、誰に連絡をし、遺体をどこへ

持って行き、どの火葬場で焼くかを身近な人に伝えておく。場合によっては、散骨や献体もありうる。人間は死ねば千数百円の単なる物体になるが、その物体の処理方向に遺族は頭を悩ますので、それを防ぐために処理方法を伝えておく。

第4に、葬式と墓についても、残されて人が困らない程度に、自分の希望をつたえておく。近年、葬式が簡素化している。たくさんの人が参列する葬式は地縁・血縁が根強い地域に限られ、新興住宅地や都会では近親者だけが参列する家族葬が増えている。そのような状況を踏まえ、自分の葬儀方法や遺骨をどの墓に入れるか、あるいは散骨するかなどを、家族や周りの人に口頭にしる文書にしるはっきり伝えておく。

第5に、以上の始末が最後までとり行える程度の費用は、謝礼と共に用意しておく。何はともあれ先立つものはお金である。残された人々が本人の希望に沿うようにとり行おうとしても、お金がなくては動けない。善意だけでは葬式は行えない。葬式だけでなく、人が死ぬと遺族や周りの人たちは、その人の生きた痕跡を何かと整理しなければならない。そんな作業を行ってくれる人たちに謝礼を用意することが大事である。

男女の平均寿命を比較すると女性の方が数歳長いので、孤独死は女性の方が多くに思われるが、前述したように、80歳以上は少し女性が多いが、60歳代と70歳代とでは圧倒的に男性が多い。別居だけでなく同居の場合も、「男性である」ことが家族との交流を妨げる最大の要因なのである。「男性である」ことは生きている時も死んだ時も孤独なのである。

そこで男性が1人暮らしになった場合、守るべきことは次の10か条である。

第1に、衣食住は自立の基本にキである。着るもの、食べるもの、住まいだが、なかでも食事が基本中の基本で、暴飲暴食を避け、腹8分目を心掛け、野菜や果物をたっぷり取る。規則正しい生活をして、睡眠を十分にとり、1人の食卓でも3食きちんととり、身の回りを清潔にして過ごす。

第2に、体調管理は自分の責任である。病気になるれば生活の質が落ち、生きていることに嫌気がさす。そうならないために自分自身のために自分の身体を心にかける。生活習慣病にならないために、自分の身体の声に耳を傾け、自分を過信しない。

第3に、酒、ギャンブル、薬物などにはまらない。晩酌が何よりの楽しみという男性は多いだろうが、度を超すと健康を害する。競輪、競馬、パチンコなどのギャンブルもほどほどにしないと、のめり込んですってんてんになりかねない。薬物は若者に比べて少ないだろうが、軽い気持ちで摂取すると中毒になることもある。薬物はもちろんギャンブルからもできるだけ遠ざかり、酒はたしなみ程度にする。

第4に、過去の栄光を誇らない。現役時代の自慢話をしょっちゅうする人がいるが、聞かされる側としてはうんざりする。過去の栄光は自分の胸にしまい、今の自分をありのまま受入れる。人の値打ちは、はたが見つけてくれるので、自分で言うものではない。

第5に、人の話をよく聞く。「話し上手は聞き上手」というが、自分ばかりしゃべるのではなく、相手の話に耳を傾ける。間をもたせようとしてしゃべくりまわるのがサービスだと勘違いしている男性が多いが、人の話をじっくり聞くだけで、自分の好感度が上がる。

第6に、つきあいは利害損得を離れる。仕事上の関係は損得がらみだが、定年後は水のように淡白で清らかな付き合いをする。欲得がらみの下心があれば相手にすぐわかる。人を利

用しようとして相手に近づかず、自分を利用しようとする人を近づけない。

第7に、女性の友人には下心をもたない。1人暮らしの男性には何かと世話をしたがる女性が現れるが、特定の女性だけと付き合いずグループ交際を心掛ける。家族定年前に逆戻りするのではなく、男女を問わずたくさん友人を持つ。

第8に、世代に違う友人を求める。同世代であれば、他者と比較して競り合うことにもなるが、世代が違くと競り合いとは無縁である。世代の違う友人は異文化を運んでくれるし、生命力にあふれているので、自分も若々しくなる。

第9に、資産と収入の管理は確実にやる。資産と収入の管理は自分でやり、あまい投資話や子どもからの二世帯ローンなどのお誘いにのらない。将来寝たきりになっても、介護に要する費用を計算し、葬式と墓の費用を残して自分のために使う。

第10に、まさかのとときのセーフティネットを用意する。変調を感じた時、気軽に連絡できる相手を何人か作っておく。1日1回か数日に一度は、連絡したり顔を合わせたりする関係をつくっておく。そうすれば死後、発見が遅れて周りに迷惑がかかることを防げる。

家族や地域社会のつながりが希薄になるにつれて、自ら身体を使って積極的に作り出す選択縁が重要になっている。そんな選択縁づきあいをやるに際して、男が肝に銘ずべき事柄がある。

まず第1に、自分と相手の前歴は言わない、聞かない。現役時代の自慢話はもとよりどんな職業についていたかも言わない。定年後は誰でも肩書きをなくした1人の人間に過ぎないことを心に留める。

第2に、家族のことは言わない、聞かない。家族の自慢話をしても他人は興味を持たないか、かえって反発を感じず。相手は家族を持たないかもしれないし、家族問題で悩んでいるかもしれない。家族がいとうといまいと、裸の1人の人間として互いに接する。

第3に、自分と相手の学歴は言わない、問わない。高齢者になるほど学歴格差が大きい。昔の学歴格差は経済格差であって能力格差ではない。自分や相手の学歴に応じて付き合い方を変えたりすると、とたんに毛嫌いされる。

第4に、お金の貸し借りをしない。お金の直接の貸し借りは人年関係に上下の関係を持ち込むことになる。何人かで連れ立って飲食する場合も必ず割り勘にする。男が女の分を払うのも禁止である。

第5に、お互いに「先生」や「役職名」で呼び合わない。「先生と呼ばれるほどの馬鹿じゃなし」という戯言があるが、酒場などで「先生」とは「社長」と持ち上げて、お金を使わせようとする。だが、日常生活では、相手を名前できちんと呼び、先生や「役職名」でおだててはいけない。

第6に、上から目線でもの言わない、その場を仕切ろうとしない。定年前は職場では一番上かそれに近い立場にいたので、定年後もついに上司の立場に立ち、他の人を仕切ろうとするが、選択縁はあくまで先に入ったものが指導的な立場にいるし、そもそも対等な関係なのである。

第7に、特技やノウハウは相手から要求があったときにだけ発揮する。特技やノウハウを持っていると、見せびらかしたがるのが人情だが、要求があった時にだけ発揮する。

おわりに

人間の縁は、血縁、地縁が基礎であり、それに職場の職縁やボランティアやサークルなどの選択縁が加わる。結婚して家族を持ち、地域社会の活動も行い、職場では同僚、先輩、後輩などとの付き合いがあり、ボランティアやスポーツなどでいろいろな人と付き合う。このような縁を結ぶことが理想であるが、独身者や単身世帯の増加、非正規社員の増加、長時間労働による余暇活動の減少などで、他者との交流がなく、孤立する人が目立ってきた。無縁の人々が増加したのである。

このような無縁社会の到来に際して、それを生んだ背景、さらに孤独死に陥らないまでも、老後は1人ぼっちにならない方策を考察した。いまや家族のあるなしにかかわらず、核家族化さらには単身世帯化の進行に伴い、誰でも1人暮らしになる可能性はある。高齢者だけでなく若者の1人暮らしも増えている。若者の1人暮らしは自由気ままな生活をおくる手立てのものなるが、高齢者の1人暮らしは寂しさや惨めさが伴いがちである。健康な時は若者と同様に1人暮らしの生活を楽しめるだろうが、病気になると看病してくれる人がおらず、場合によっては孤独死になる。

そこで血縁や地縁、職縁に頼らない選択縁の重要性が増している。昨年の東日本大震災を契機として、被害者を物心両面にわたって助けようとする動きが沸き起こり、見ず知らずの人たちの間で絆が強められたと言われている。無縁社会と言われ、人々の間のつながりが断ち切られていると嘆く声が強まっているが、災害などの非常時には助け合いの精神が発揮されるのである。

日本人の心の底には、お互いさまとか「情けは人のためならず」といった、困っている他人を思いやるやさしさが脈々と流れている。そんなやさしさがあわただし日常生活の陰に追いやられている。したがって今後は非常時だけではなく、日常生活においても血縁や地縁、職縁を超え、他人を思いやる優しさを根本に備えた選択縁の人間関係を広めることが、無縁社会を防ぐ方策となる。

*本稿は、サテライト市民講座で2011年6月25日に行った講演を加筆したものである。

文献

北日本新聞

内閣府、高齢社会白書、平成22年版

内閣府、国民生活白書、平成20年版

NHK取材班、無縁社会、文藝春秋、(2010)

上野千鶴子、おひとりさまの老後、法研、(2007)

上野千鶴子、男おひとりさま道、法研、(2009)

島田裕巳、人はひとりで死ぬ、NHK出版、(2011)